“漢字かな交じり文”は読解力を高めるすばらしい表記法

日本人が優秀なのは、「日本語が漢字とひらがなで綴られる“漢字かな交じり文”で書かれるためである」と指摘されることがあります。

次に紹介する『いろは歌』を読み比べてみてください。

いろはにほへとちりぬるを
わかよたれそつねならむ
うゐのおくやまけふこえて
あさきゆめみしゑひもせず

色は匂へど散りぬるを
我が世誰ぞ常ならむ
有為の奥山今日越えて
浅き夢見じ酔ひもせず

ひらがなだけで綴ったものと、漢字かな交じりのものと、どちらのほうが意味がわかりやすいかと聞かれて、後者に手を上げるのに異議を唱える人はいないでしょう。

漢字は“目で見る言葉”ですから、目で見て意味やイメージを把握することができます。「色」という漢字を見ると、“色”のイメージが浮かびます。そして、ひらがなが交じっていることで、文章の中で漢字（＝意味）がクローズアップされるため、認識することがよりスムーズになり、文章の理解がより簡単になります。

ひらがなだけ、もしくは漢字だけの文章というのは実に、読みにくいものです。

漢字かな交じり文こそ、優れた読解力を生み出す母体であり、世界に誇れる表記法と明言できます。

ところで、漢字かな交じり文では、漢字（＝意味）を拾いあげていくのがスムーズになると述べましたが、これはいい得て妙で、私たちの脳は、漢字とひらがなでは、漢字のほうに早く反応することがわかっています。

ここに、東京電機大学とＮＴＴ基礎研究所が共同研究により、「漢字と“かな”に脳がどのように反応するか」を調べた、興味深い報告があ

ります（次真の図参照）。

その報告によると、私たちの脳は、漢字に対しては 0.1 秒で反応していますが、かなに反応するまでには 0.3 秒と、三倍時間がかかっています。

では、なぜ、かなのほうが反応するまでに時間がかかるのでしょうか。これは、漢字が“表意文字”であり、かなが“表音文字”であることに起因します。

私たちが、ひらがなを見ると、その文字をいったん音声化してから意味を認識することになります。ところが、漢字を見たときは、直接的に意味がわかります。“音声化”のプロセスを必要とするか、しないかで、脳の反応の時間差が生まれるのです。

漢字かな交じり文は、“意怒味”と“音”のメリハリにより、一層、“意味”をとらえやすくしているといえます。

この研究報告ではもう一つ、驚くべき事実が明らかにされています。

ご存じのように、私たちの脳は右脳と左脳に分かれており、それぞれ役割を分担しています。右脳は全体を把握するのが得意で、一目でパターンをとらえることに優れています。絵やイメージは右脳で処理されます。片や、左脳は細部にこだわり、複雑なパターンを分解するのが上手です。言葉や文字は左脳で処理されます。

さて、研究報告に戻りますが、ひらがなに対しては、確かに左脳だけが反応していますが、漢字に対しては左脳と右脳の両方が反応していることが判明したのです。

たとえば、「山」という漢字を見たとき、“ ”の絵やイメージが浮かぶのは、右脳が機能していることの証しですし、それを山を意味する文字として理解するのは左脳の働きです。

これは、注目に値します。特に小学校低学年までの子供や、知的障害児、自閉症児などは、右脳が優位といわれます。ですから、彼らは漢字をイメージとしてとらえるのがとても速く、その分、その漢字の意味を左脳で理解するのも速くなります。つまり、ひらがなよりも漢字のほうがやさしくて、吸収しやすいといえるのです。